

# メディアリテラシー教育の論拠としての記号学

Semiotics as a Basis for Media Literacy Education

齋藤 俊則

大岩 元

Toshinori SAITOU

Hajime OHIWA

慶應義塾大学環境情報学部

Faculty of Environmental Information, Keio University

<あらまし> 情報教育の教科書シリーズの1冊としてメディアリテラシーの教科書を執筆した。この教科書の特徴はメディアリテラシーの教育内容として記号学そのものを取り上げカリキュラム化した点にある。本発表ではこの教科書の背景にある筆者らのメディアリテラシーに対する解釈と、その教育内容に関する主張を提示する。

メディアリテラシー 記号学 メディアに対するクリティカルな姿勢 相対化 情報教育

## 1. はじめに

国内におけるメディアリテラシー教育への取り組みは近年急速に広まりつつあるが、その内容は現場によってさまざまである。これはメディアリテラシーという言葉自体が国内においてはまだ目新しいものであることに加え、その解釈にも幅があることを示している。メディアリテラシーの教育内容を論ずるにあたっては、それが何を目的とした教育活動である(べき)かを再確認する必要がある。

筆者の1人(齋藤)は情報教育の教科書シリーズの1冊としてメディアリテラシーの教科書を執筆した(齋藤 2002)。この教科書はメディアリテラシー教育に対する筆者らの主張をカリキュラム化したものである。本稿では、そのカリキュラムに反映される教育的な観点からの主張を整理し、あらためて提示するとともに、カリキュラム化された教育内容の概略にも触れる。

## 2. メディアリテラシー教育の目的と教育内容

メディアリテラシーの目的は、筆者らの理解するところによれば次の2点に集約される。

- ・メディアに対するクリティカルな姿勢を育むこと
- ・クリティカルな姿勢に裏打ちされた創造的な表現能力を育むこと

これらに類する理解は社会学者やマスコミュニケーション論の研究者によってもすでに提示されている(鈴木 1997)が、筆者らの主張を明確にするために、ここでは次の点を強調しておきたい。

まず「メディア」が指しているのはマスメディアだけでなく、そこにインターネットも含まれるべきであること。これはWWWを中心に情報メディアとしてのインターネットが実生活の中に普及・定着する国内の状況を考えれば必然的である。しかし従来の社会学者やマスコミュニケーション論の研究者たちによって展開されてきたメディアリテラシーへの取り組みにおいては、マスメディアが主な教育対象であり、インターネットについては必ずしも十分に扱われてこなかった。つぎに「クリティカルな姿勢」とはメディアによって得られる情報に対する姿勢のみならず、メディアを活用する行為自体に対する「クリティカルな姿勢」も指していること。これはインターネットを視野に入れた場合、メディアとの関わりは単に情報源としての利用にとどまらず、より多様な形が考えられるからである。その場合、とりわけ「いかなる目的でメディアを用いるか」という点に対するクリティカルな観点からの反省が必要不可欠となる。

上述のメディアリテラシーの目的を前提とするならば、その教育内容には「クリティカルな姿勢」を育む契機となるものが含まれなければならない。その意味からすれば、単なるメディア操作の実習だけをもってメディアリテラシーとするのは不十分であるといわざるを得ない。また同様に、テレビ番組の制作現場の舞台裏を知ることや、メディアを用いて何らかの作品を作ること、そこにクリティカルな考察の機会を欠くならばやはり不十分である。

### 3. クリティカルな実践の論拠としての記号学

メディアに対するクリティカルな姿勢を育むためには、そのような姿勢の基盤を与える原理を教育すべきである。その意味で、筆者らはメディアリテラシーの教育内容に「記号学」の基本概念の学習を組み込むことを提唱する。その理由は次の2点による。

- 1) 記号学はメディアリテラシーの学問的背景のもっともコアな部分を担う学問である
- 2) 記号学から得られる知見はメディアを活用したさまざまな活動に開かれている

1) はメディアリテラシーの考え方が記号学の影響を受けた欧米のメディア論や文化研究の研究者たちによって形作られてきたことを指している(吉見 2000)。たとえばメディアリテラシーの先駆的なカリキュラムとしてしばしば言及されるカナダ・オンタリオ州教育省のカリキュラム(Ontario 1989)には、授業のアプローチの一例として記号学を取り上げることが明確に述べられている。これらの事実は、記号学が明らかにする事柄がメディアに対するクリティカルな実践の論拠として欠かせないことを意味している。

2) は記号学を構成する概念を適用することによって、メディアに関連するさまざまな現象を分析解釈することが可能であることを指している。そのことによって、メディアの種別や関わり方(読み取りの対象としてのメディア、表現の手段としてのメディア)を問わず、クリティカルな反省の観点を与えられる。なぜなら記号学は、狭い意味での表象のみならず、人間の行為も含めた多様な文化現象を分析する枠組みとして、長年にわたって用いられてきた概念体系だからである。

### 4. 記号学を論拠とするメディアリテラシーのカリキュラム

#### 4.1 カリキュラムの前提となる認知モデル

筆者らの提案するカリキュラムの教育内容は図1に示される認知モデルを前提とする。このモデルは記号学の観点から捉えられるメディアと人との関わりの様子を抽象化したものである。このカリキュラムではさまざまな観点から人とメディアとの関わりを議論するが(4.2項を参照)、すべての議論はこの認知モデルの獲得と修正の過程と

しての意味合いを持つ。

以下、このモデルに含まれる構成要素を取り上げつつカリキュラムの概要を説明する。

#### 記号、メディアテキスト、メディア

このカリキュラムにおいて記号は「人間の感覚に訴える物質的存在であると同時に、それを感知する人間に意味内容を想起させるもの」と定義される。そしてテレビ番組、新聞・雑誌の記事、Webページなど、メディアによってもたらされるあらゆる表現物を記号(による構成物)として見る(読解する)ことがこのカリキュラムの趣旨の一つである。その際、読解の対象となる表現物(=記号による構成物)のことを特にメディアテキストと呼ぶ。また、このカリキュラムでは読み取られる意味内容に影響を与えるという点で、メディアもまた一つの記号であると捉える立場に立つ。

#### 送り手、読み手

一般的に送り手とはメディアテキストを制作し、かつメディアを通して読み手に対して送り出す者を指し、読み手とはメディアからメディアテキストを受け取り、かつそこから意味内容を読み取る者を指す。カリキュラムの最初の時点では、このような送り手・読み手の区別を自明のものとしながら議論を進める。しかし現実においてこの区別は必ずしも自明ではない。たとえばインターネットにおいては、送り手と読み手の区別は極めてあいまいである。またマスメディアにおいては、メディアテキストの制作者とメディアの所有者は必ずしも一致せず、さらにメディアテキストのあり方に対する影響力という観点からすれば、広告主などの存在も無視できない。カリキュラムの後半では、このような現実の多様な側面に注目しながらそれぞれの状況の解釈の仕方を議論する。

#### コード(記号化コード、解釈コード)

コードとは、記号に含まれる表現物としての側面と意味内容としての側面を対応づけたり、異なる記号同士の配列の仕方の範例や特定の配列によって新たに生まれる意味内容などを規定する、社会的な約束事の体系である。カリキュラムの最初の段階では、コードが共有されることによって送り手と読み手との間に意味伝達の可能性が生ずるこ

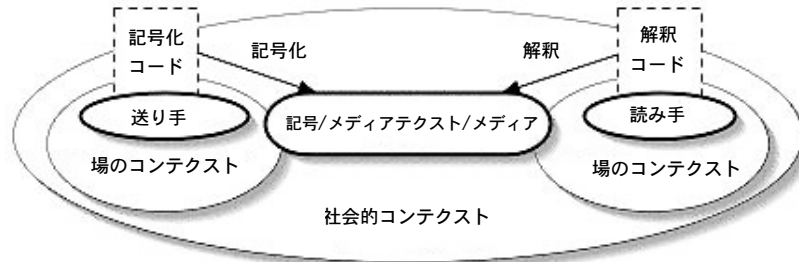


図1: メディアと人との関わりのスタティックモデル<sup>1)</sup>

とを説明する。カリキュラムが進行するに伴い、現実の場面では必ずしもコードの共有を前提とすることができないことや、そもそもコード（に代表される暗黙の社会的な規約）とは「はじめからあるもの」ではなく、個々のコミュニケーションの実践によって「形成され続けるもの」であることなど、コードのさまざまな性質を取り上げて議論する。さらに、社会的な側面からはコードが特定の社会秩序の規定としての意味を持つことや、個々人によって担われたコードはその人の価値観そのものであること、さらにそうした社会秩序ないし価値観の体系としてのコードが現実の社会では誰の手によっていかにして形成されるのかといった事柄を、社会におけるメディアの機能と絡めながら取り上げる。

### コンテキスト（場のコンテキスト、社会的コンテキスト）

コンテキストとは、場の状況や文脈といった、コミュニケーションのあり方（物事の表し方や読み取り方）に対して影響を与えるメディアテキスト外部の力全般を指す。カリキュラムの最初の段階では、メディア視聴の現場に直接作用するミクロなコンテキスト（＝場のコンテキスト）に注目し、その効用を議論する。特にコンテキストとコードとの間には相互作用的な関係があり、その作用によってメディアテキストから読み取られる意味内容が決まるとともに、作用の結果としてコードのあり方に変動が起こることなどを取り上げる。さらに後半では、よりマクロな観点からはそれぞれの時点での社会のあり方（政治、経済、文化などの状況）が、その社会において生産されるメディアテキストの種類や内容、およびそのようなメディアテキストの解釈のされ方に大きな影響を与えるコンテキスト（＝社会的コンテキスト）として見なされること、また社会的コンテキストとその社

会において力を持つ価値観との間には常に相互作用的な関係があり、メディアの存在がそのような関係の形成に対して大きな影響力を持つこと、などを議論する。

## 4.2 カリキュラムの目標と構成

このカリキュラムが目標とするのは、学習者が日常における各自のメディアとの関わり方を相対化できる能力を身に付けることである。この目標は、図1の認知モデルを前提とする際に「メディアに対するクリティカルな姿勢」が意味するところを、筆者らの視点から具体化した結果得られたものである。メディアとの関わり方の相対化とは、より詳しくは以下の二つの相対化を指す。

- ・メディアとの関わりにおいて学習者が無意識のうちに依拠するコードの相対化
- ・メディアと学習者との関係を取り巻くミクロなコンテキスト、マクロなコンテキストの相対化

このカリキュラムでは上記の二つの相対化をいくつかの段階を踏みながら行う。その段階の構成と、それぞれの段階ごとの学習内容等を表1にまとめた。以下、それぞれの段階の概要を説明する。

### 第1段階

第1段階での主な学習内容は「読む行為のメカニズム」を記号学的に解釈することである。もっとも身近な記号の例として「言葉」を取り上げて、言葉と読み手との関わりによって意味内容が読み取られる過程を記号学の観点から考察する。この段階では一般的な記号学の入門書（たとえば、池上 1984）で取り上げられる程度の記号学の基本概念が理解できることを重視する。結果として読み手による言葉の読み取りを「記号-コード/コンテキスト-読み手」のスタティックな図式にしたがって解釈できることを目指す。

## 第2段階

第1段階での学習の結果を踏まえて実際のメディアテキストの読解を試みる。日常的な視聴とは異なる視点からメディアテキストを眺めることを通して、普段はあまり気づかないメディアテキストの特徴（たとえば特定の表現形式が反復して用いられることなど）を発見し、その意味を解釈する作業を行う。この段階ではメディアテキストと読み手との関係に焦点が当てられ、「メディアテキスト-コード/コンテキスト-読み手」のスタティクな図式で現実を解釈できることを目指す。

## 第3段階

この段階では「視聴の場のコンテキストと解釈コードの関係」に焦点を当て、読み手（＝視聴者）がメディアテキストから読み取る意味内容に影響を与える要因を考察する。これまでは主にメディアテキストと読み手との閉じた図式関係に焦点が当てられてきたが、この段階に至っては視聴の場のコンテキストを考察の中心に据え、コンテキストと視聴者の解釈コードとの間のダイナミックな関係の把握に力点を置く。

## 第4段階

第3段階に引き続き、コンテキストとコードの間にあるダイナミックな関係についてを考察する。この段階では「社会的コンテキストと解釈コード・記号化コード」に焦点を当て、第3段階よりもマクロな「社会」の観点から考察を行う。

## 第5段階

学習の最終段階として、これまでに学んだ事柄を踏まえ、学習者各自がメディアとの関わりを改めて振り返る機会を設ける。ここで焦点が当てられるのは学習者とメディアとの関わり全般である。とりわけ、各自のコンテキストに応じた学習者自身にとっての「メディアの意味」や、そこから生ずる「メディアとの適切な距離」を考えることが主題となる。このような振り返りと見直しの作業を、ここではインターネットのメディアとしての活用を例にとりながら行う。

学習段階	学習内容	学習の焦点(a)と学習の論拠(b)
第1段階	読む行為のメカニズム	a.言葉と読み手の関係 b.スタティクな記号学（基本）
第2段階	メディアテキストのクリティカルな読解	a.メディアテキストと読み手の関係 b.スタティクな記号学（応用）
第3段階	日常的な視聴の場の考察	a.視聴の場のコンテキストと解釈コードの関係 b.ダイナミックな記号学（基本）
第4段階	社会とメディアの関係の考察	a.社会的コンテキストと解釈コード・記号化コードの関係 b.ダイナミックな記号学（応用）
第5段階	「メディアと関わること」の考察と実践	a.「自己」とメディアの関係 b.日常的な実践における記号学

表1：カリキュラムの構成

## 5. まとめ

本稿では記号学を論拠とするメディアリテラシーのカリキュラムの提案を行った。本稿によって筆者らの理想とするメディアリテラシー教育の一端を示せたと思うが、これだけがメディアリテラシー教育のすべてであるとは考えていない。むしろ従来のさまざまな取り組み（特にメディアを活用した表現の実践など）との間で往復的に学習されることこそが望ましい。その意味で、とりわけ表現活動の実践を中心とするカリキュラムとの架橋をいかにはかっているかが、筆者らの今後の課題となるであろう。

## 注

- 1) あえて「スタティクモデル」としたのは、このモデルがあくまで現実を静的に抽象化したものに過ぎないことを強調するためである。

## 参考文献

- 池上嘉彦(1984) 記号論への招待. 岩波書店, 東京
- Ontario Ministry of Education. (1989) *Media Literacy: Resource Guide*. Queen's Printer for Ontario, Ontario (FTC・市民のテレビの会(訳)(1992) メディア・リテラシー マスメディアを読み解く. リベルタ出版, 東京)
- 斎藤俊則(2002) 情報がひらく新しい世界 9 メディアリテラシー. 共立出版, 東京
- 鈴木みどり(1997) メディア・リテラシーを学ぶ人のために. 世界思想社, 京都
- 吉見俊哉(2000) カルチュラル・スタディーズ. 岩波書店, 東京